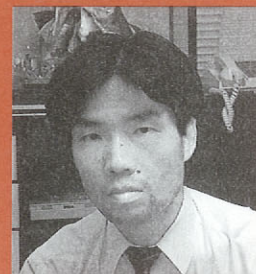


働く人々にとって



地球人として
行動することを
学ぶ

自分にやれることをやろう。男のネットワークを生かした自然保護運動。

「自分たちのやれることから自然保護をやっとう」。男性八人のささやかな気持ちが集まって四年前、「自然保護ネットワーク熊本(NNC)」が発足しました。現在、メンバーは、医師、建築設計士、教師、会社員など十八名です。



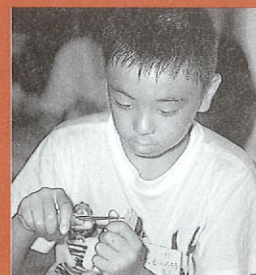
ビールのピッチもあがり、「勉強会」は毎回盛りあがる。

片岡佳信さん(三九)の本職は営業マン。仕事柄外まわりが多いので、NNCでは、仕事先の事業所に設置したWF(世界自然保護基金)箱の募金回収を担当しています。また、アルミ缶のリサイクル運動にも積極的に参加。ビニール袋を手に、花見の宴や祭り会場に出かけては拾い集めてきます。活動を始めた頃は、アルミ缶とスチール缶を分別せずに出したために赤字を出してしまっただけ。「リサイクルの仕組みなど、いろいろなことを学びました」と片岡さん。

NNCでの勉強会は、海外に出かけたメンバーから世界の状況を報告してもらったり、自然保護運動をしている全国各地のグループから方法を聞いたります。

いろいろな職業人が集まり、さらにその友だちが集まってくる。このようにして得られる情報は予想以上に莫大で多種多様です。「働いている男たちのネットワーク力を生かしていきたい」。頼もしい言葉が返ってきました。

子供たちにとって



体験学習を通して
地域を学ぶ

「この子は鉛筆も削れないなんて言わせない。小刀に挑戦した」

小刀の刃の背に両親指を当て、木片を削っていく。くるくるつと丸まって木屑が削れていけばそれは上手な証拠。中には「あーっ、指は切った」と少年。「血のもつたいなかけん。舐めとけよ」とおっちゃん先生。少年の青ざめた顔が先生の冗談に次第に明るくほほえみます。

先生は、三加和町のナイフカービング作家、上妻利弘さん(三二)。子どもたちは、同町の小学四年生以上の希望者を募って作られた「チャレンジバンブークラブ」のメンバー。学校では体験できないことを学習したり自然との触れ合いなどを目的として、同町教育委員会が主催して発足しました。

子どもたちは、他にも「手すき和紙づくり」田中城の発掘調査「竹とんぼ製作」などに挑戦します。昔は和紙を作る家が八百軒もあったという三加和町。中世の城が点在する三加和町。竹材の



やったー！ うまくできたでしょ！

豊富な三加和町といった具合に、子どもたちは、工芸工作を学びながら自分たちの住む町の姿を学んでいきます。上妻さんのように、町内でその道に詳しい大人が先生です。二時間後には魚のバッジの出来上がり。どれもなかなかの出来ばえです。ケガした者は「はい」。指の絆創膏も誇らしげに、ほとんどの子が元気づく手を上げました。

障害者にとって



共通体験から
始まる
仲間づくり

障害者と健常者、日本と中国。それぞれに学ぶ「九州青年の船」

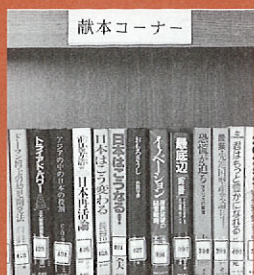
八月最後の日曜日。「九州青年の船」が約四百名の若者を乗せて、八代外港から中国へ向けて二週間の旅に出発しました。「九州青年の船」は、九州各県の共同事業として昭和四十七年から実施されているもので、二十代の若者を対象に、船内生活や中国各地への訪



もう、すっかり、兄弟のよう。撮影/小手川誠一郎

問を通して、国際的な人間の育成と日中友好親善を目的とした事業です。今年からは、福島知事の提言により障害者も参加することになり、本県からは有田智子さん(二六)と西島健一郎さん(二八)が乗船しました。「友達ができることが、この旅の一番の収穫でした」と有田さん。九州展の展示物を作るために打ち合わせをしたり、事前研修の合宿をしたりと、若者たちは、乗船する前からすっかり友達に。「みんなが、乗船する前に出場したバスケットの試合まで応援しに来てくれて感激しました」と西島さん。中国では北京市内を歩いたり、万里の長城へ出かけたりと、歩行の不自由な二人にとっては厳しい行程もありました。「僕たちの参加が来年につながるべし」と頑張る二人。階段の昇降の際は仲間が支えてくれます。健常者も二人と生活を共にすることで、障害者への理解が深まったようです。今年の「九州青年の船」は、それぞれが学び合う場にもなりました。

県民にとって



学ぶ楽しみを
共に分かち合う

自分たちで本を集めよう。自分たちの図書館をつくらう。

全国平均三六%、熊本県一八・一%。これは市町村立図書館の設置率。熊本県は全国最下位です。一方、図書館に対する県民のニーズは、図書館を持たない市町村の八割が「図書館整備は必要」と答えています。(平成二年・県教委アンケート調査による)

図書館整備が遅れている背景には、本を揃えるための財政不足が挙げられます。このような状況下で、「いっそのこと、自分たちで既に読んだ本を持ち寄って図書館を作ったらどうか？」という献本運動が広がっています。八代郡竜北町もその一つ。平成四年度の事業として、「手づくり図書館運動」を進めています。モットーは「住民一人一冊」。婦人会や青年団など地域リーダーに呼びかけて運動は始まり、同町故人の蔵書を遺族が寄贈したり、同町出身者が遠方から送ってくるなど、約六百冊が集まりました。



子どもたちは本が大好き。夏休みの図書室は大人気。

同町の全蔵書は約九百冊。そして、平成三年度の貸出し状況は、県移動図書館、ミニ図書館、町の図書室を合わせた約六千冊です。「まだまだ足りない」と教育委員会の藤本一臣さん。住民による住民のための献本運動は始まったばかりです。なお献本運動に関するお問い合わせは、各市町村教育委員会または、県教育委員会社会教育課。〇九六・三八三・一一一まで。